

訳者  
インタビュー

第一回音楽本大賞 個人賞受賞

『あの音を求めて——モリコーネ、音楽・映画・人生を語る』

エンニオ・モリコーネ／アレックスandro・デ・ローザ著  
石田聖子・岡部源蔵訳、小沼純一解説 (ライルムアート社)

石田 聖子

聞き手 木内 堯



翻訳にいたる経緯

——まず、この本を翻訳することになった経緯と、イタリア語の原書を最初に読んだときの感想を教えてください。

石田 二〇一六年一月に、著者のアレックスandro・デ・ローザからFacebookに直接メッセージが来たんです。原書の刊行は四月ですから、それより前のことです。こういう本が出るからぜひ日本語に翻訳してほしいということでした。アレックスandroはこの本のことをすごく大切に思っていて、翻訳は自分の知っている信頼のおける人にお願いたいというので、これまでに翻訳された全ての言語で翻訳者に直接アプローチをする形で翻訳を実現してきました。ちなみに、この本はこれまでに(近日刊行予定のものを含めて)十三言語に訳されています。

—— 本日は、世界教養学科の石田聖子先生に、石田先生が岡部源蔵さんと一緒に翻訳された『あの音を求めて——モリコーネ、音楽・映画・人生を語る』について、お話を伺いたいと思います。最初に個人的な話を少しさせてもらおうと、モリコーネの映画音楽、特に『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』のサウンドトラックは昔から大好きで、今回このようにモリコーネについてお話を聞けることを、大変嬉しく思っています。また、石田先生の翻訳を読むのは今回が二度目で、短編小説のアンソロジー『囚われて』に収録されていたグラツィア・デレッダの「夜に」という短編を読ませてもらったことがあります。映画の魅力をを持った抜群に面白い作品で、印象に残っています。今回の本も頭に入っているととても読みやすい訳文で、大変楽しく読ませてもらいました。

私の場合、アレックスandroとは直接の知り合いではなかったんですが、大学時代の同期の知り合いという繋がりで、私がイタリア映画の研究をしているということもあって、声をかけてもらいました。もともとモリコーネは大好きだったので、ぜひやってみようと思いい、本を送ってもらって読んだんですが、最初にイタリア語で読んだ時は率直に一読者として面白いと思いました。モリコーネの人となりについているんな発見がありました。

—— 直接の指名を受けての翻訳だったわけですね。共訳になったのは

なぜですか。

石田 この本の後半は音楽に関するかなり専門的な対話になっていきます。私は音楽に詳しくないので、ひとりじゃ太刀打ちできないと思います。そこで、アレックスサンドロとの間を仲介してくれた岡部さんに声をかけました。岡部さんはイタリア語を学んだあと、アレックスサンドロと一緒にオランダの音楽院で音楽を学んだ人です。

### モリコーネ再評価の中で

——モリコーネについては、他にもインタビュアー本がすでに刊行されていて、ドキュメンタリー映画（『モリコーネ 映画が恋した音楽家』）も公開されています。石田先生が訳された本の刊行とドキュメンタリー映画の公開はちょうど同じタイミングですよ。これは単なる偶然なのか、それとも何か示し合わせたものがあつたのでしょうか。また、この本と既に刊行されているインタビュアー本やドキュメンタリー映画との違いが何かあれば、教えてください。

石田 モリコーネの自伝はこれまでで計三冊刊行されています。うち一冊は日本語に翻訳されています。自伝は全てインタビュアー形式です。

モリコーネは、オープンな性格という一般的なイメージのイタリア人と違って、寡黙で、他人に簡単には心を開かないタイプの人なんです。なので、インタビュアーによって見せる顔がずいぶん異なっ

ています。私自身は日本語訳されたモリコーネの自伝は読んだことがあつたんですが、この本を読んだ時にその本とは全く違うモリコーネの顔が見えたという気がしました。

この本のインタビュアーのアレックスサンドロはモリコーネの約六十歳年下なんです。さらに同じ音楽家ということもあつて、それが大きな影響を与えていると思います。モリコーネは孫のような年齢差のアレックスサンドロに、心を開いて、かなり率直に語っている印象を受けました。

あと、これは本を読んでいただくとうわかるんですが、モリコーネは「映画音楽家」と呼ばれることに葛藤を抱えてきた人物なんです。アレックスサンドロは音楽家ということで、モリコーネのことを「映画音楽家」としてよりも、映画抜きの「音楽家」として捉えています。モリコーネにとっては自分の気持ちを理解してくれる相手だと感じたことだと思えます。実際にモリコーネはこの本こそは「真実の書」だと言っています。モリコーネ自身のお墨付きを得ているほど、自分自身が表現できているということ、そのあたりが他のインタビュアー本とは異なる点だと思います。

ドキュメンタリー映画のほうなんですが、これはジュゼッペ・トルナトーレという、モリコーネと約三十歳の差がある、盟友といえるような関係の監督が作った映画ですね。なんだかんだ言つてモリコーネの大きな魅力は映画音楽ですよ。この作品では、音楽と映像が一緒に観られるので、また違うアプローチの、説得力ある作品に仕上がっていると思います。

時間関係でいうと、アレックスサンドロのほうが先に、この本のためのインタビュアーを開始していました。アレックスサンドロはトルナトーレにもインタビュアーしています。

——映画のほうにも出演していましたよね。

石田 アレックスサンドロがこの本を準備している傍らで、トルナトーレも映画を作っていました。モリコーネはかなり高齢でしたし、アレックスサンドロやトルナトーレのような信頼できる仲間の力を借りて自分の足跡を残しておきたいという思いがあつたんだろうと思います。



——モリコーネというところ、いろんな盟友がいるわけですよ。セルジオ・レオーネが小学校の同級生だったという面白いエピソードがこの本には出てきます。同じ世代の人たちと一緒に仕事をしていた一方で、トルナトーレやデ・ローザのような、年下の芸術家とも一緒に仕事をしているのが、印象的でした。

### ドキュメンタリー映画とインタビュー本

——ドキュメンタリー映画のほうは、映像と音楽と一緒に観られるという点ではたしかにわかりやすいんですが、話の内容としては、こちらのインタビュー本のほうが深く掘り下げられているという印象を受けました。訳された本の中で、特に印象に残っているエピソードや、読者にここをぜひ読んでもらいたいという箇所があれば、教えてください。

石田 自身これまで映画を観るとき、音楽のことを副次的なものとして捉えていました。それがこの本を読んでからはじめて、映画における音楽の重要性に気づかされました。映画というのは目に見えるものだと思うんですが、決してそうではない。本当に目から鱗が落ちる思いでした。このことについてモリコーネは本のなかで、言葉を変え、角度を変え、語ってくれていて、そのことが一番印象に残っています。

あと自伝ということで、モリコーネの生き様にも心を打たれました。モリコーネは世界的に成功している人なので、才能に恵まれた天才と思われるかもしれませんが、実際には謙虚に努力を重ねてきたということがこの本を読んでわかりました。

もともと音楽家になりたかったわけではないけれども、音楽家の子に生まれたことから、音楽家になることを自分の宿命として謙虚に受け止めていました。さらにイタリアでは映画音楽家というのは一般の音楽家より低い地位にあるとされて、数々の偏見を受けてきたわけですが、それでも腐ることなく常に目の前の、与えられた仕事に誠実に向き合ってきたという点も印象的でした。

年下の芸術家たちとのコラボレーションも随分やっていますけど、それもモリコーネが謙虚だからこそ、目の前にいるひとりの人間と対等

に向き合ってきたという側面が大きかったんだと思います。そのような謙虚さと粘り強さゆえに成功できたんだというのがよくわかりました。

### 映画と音楽

——この本を読んでいて、モリコーネのさまざまな映画音楽の創作秘話を知れるという面白さはもちろんですが、それだけではなくて、映画音楽一般について、映画音楽とはそもそも何なのか、映像と音楽の関係について、非常に示唆的な部分が多くあって、僕も石田先生と同じように、どうかそれ以上に、反省させられたというか、今まで映画を観ながら、映像や物語に目を奪われて、音楽に十分に耳を傾けてこなかったんじゃないかという反省をして、次に映画を観るときはもっと音楽に注意して観てみようと思いました。それと関連することですが、石田先生は普段映画を観るときは音楽のことはどの程度意識しているか、あるいはこの本を読んだ後で映画の見方が変わったみたいなのはあるのでしょうか。

石田 これまで映画を観るときに音楽のことは、正直言ってほとんど意識していませんでした。この本を読んでは意識して聴くようにしていますね。自然にそうなったというか。

——この本で個人的に印象に残っているのが、かつて『ウエスタン』と呼ばれていて、最近では英語のタイトルと合わせて『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト』と呼ばれている映画のオープニングの場面についての話です。この場面は、僕が大学一年生のときに受けていた松浦寿輝先生の映画論の授業でも取り上げられていたことがあって思い出に残っているんですが、あの場面の音の設計っていうんでしょうか、それについてもこの本の中で触れられていて、モリコーネという人は、単に映画に音楽をつけるだけではなく、映画のサウンド全般に対しても意識的であったということが分かって、映画音楽というのは音も含めてのものなんだなと、考えさせられました。あと、同じく『ウエスタン』の、これは僕もちょっと覚えていなくて、あとで見直さなきゃと思っている場面なんですけど、クラウディア・カルディナーレが出てくる駅の

場面について、この場面は音楽ありきで作られたという話も非常に面白かったです。

それから、モリコーネは謙虚な人柄ということですが、年下の人との共作ということかというと、タランティーノなんかもそれに当たるわけですよ。それですごいと思うのが、とにかくキャリアの長さですよ。半世紀以上ですか？

石田 そうですね。戦後からつい最近まで。

——『ヘイトフル・エイト』なんて、つい最近の映画って感じですけど、これだけ長く仕事を続けてきたっていうのは本当にすごいことですよ。

石田 その背景には、モリコーネの謙虚さというか、屈辱感があると思います。モリコーネは六十年代のセルジオ・レオーネ監督作品をきっかけに、傍から見ると成功した音楽家になったわけですが、モリコーネ自身はそのあと長く自分のことをまだまだだと思いつけてきました。それには理由もあって、一つはイタリアの音楽界からの偏見です。映画音楽という低俗なものを作っているということで、見下され続けてきました。もう一つの理由は、ハリウッドから評価されなかったことです。

——アカデミー賞をなかなか取れなかったわけですよ。

石田 最晩年まで取れませんでした。そういった理由から、自身でも、映画音楽を作っている自分に対して、真の音楽家ではないという思いがあったようです。それがあったから、成功に甘んじることなく自分との戦いを最後まで続けることになった。このことが息の長いキャリアの原動力になったんじゃないかと思います。

——モリコーネって、ドキュメンタリー映画を観たときも思ったんですけど、謙虚な人である一方で、見返してやるぞという強い気持ちを持った人ですよ。

石田 そう、プライドもすごく高い。だからこそ、長期間戦い続けられたんでしょうね。

## モリコーネとは何者か

——モリコーネを僕が初めて知ったのは高校生のときでもう二十年以上前になるんですが、当時日本でもモリコーネはもろん知られてはいたわけですけど、いまほど評価されてなかったというか、インタビュ一本が出たりとか、そういう人ではなかったかなという気がしていて、この二十年間のあいだに、日本でも評価が定まってきたという印象があるんですが、イタリアではどうなんでしょうか。あと、日本では、映画音楽家として高い評価を得ているとは言っても、映画好きの人はもちろん知っているけど、映画に興味のない人は、モリコーネって誰？っていう感じの人も正直多いと思うんですよ。イタリアではどうなんでしょうか。

石田 イタリアでは二十世紀を代表する偉大なアーティストとして圧倒的な評価を受けている一方、ちよつと評価が難しい人物でもあります。日本での難しさと重なる部分もあると思うんですが、モリコーネが成功した音楽の映画っていうのは割と大衆的な作品が多いんですよ。芸術性の高い作家映画にも多く音楽を提供しているんですが、主に大衆的な映画で名を馳せたことから、学術的な評価というのはいまだイタリアではほとんどされていません。一般的には圧倒的な人気だけでも、学術界からは敬遠されている。イタリアの音楽界はエリートのも、芸術性を追求する世界で、モリコーネはそれとはちよつと違うところにいる人という感じですよ。

——日本における坂本龍一なんかとも少し違うポジションなんですよ。

石田 違うポジションだと思います。その意味ではニーノ・ロータと比較するとわかりやすいんですが、ニーノ・ロータは特にフェリーニ監督作品で有名ですが、そういう芸術性の高さで評価されてきた映画音楽家なので、学術的にもより高く評価されてきました。モリコーネはセルジオ・レオーネのB級映画のイメージと強く結びつけられているんですよ。

モリコーネの代表曲

——もう一つお聞きしたいのは、日本で人気のある曲とイタリアで人気がある曲に違いはあるのかということです。日本だとやっぱり『ニュー・シネマ・パラダイス』の印象が強いですよね。これを聞きたいのは、僕がフランスに留学していたときに、フランスのテレビ番組でよく『続・夕陽のガンマン』のテーマ曲が、触りの部分だけ流れることがよくあって、これは日本でいうと一昔前のバラエティ番組で『仁義なき戦い』のテーマ曲が流れるみたいな使われ方だと思っんですが、日本だとやっぱり『続・夕陽のガンマン』ってそんなに聞く機会は多くないという気がします。それでお聞きしたいのが、国によって有名な曲が違うのかというのと、イタリアではテレビや街中でモリコーネの曲を耳にする機会はああるんでしょうか。

石田 あります。フィルモグラフィを見たらわかりますが、モリコーネはイタリア映画での仕事が多いんです。その意味で、日本では知られていない名曲、作品も多いですね。

——日本でそもそも公開されていない映画も多いわけですよね。  
石田 たくさんあります。イタリアでは日本とは違う音楽が人気があったりします。例えば、『殺人捜査』（エリオ・ペトリ監督、一九七〇年）。これは日本でも公開された作品ですが、日本ではモリコーネ作品として取り上げられることは少ない印象です。イタリアではかなり有名ですね。——この映画はドキュメンタリーのほうでも詳しく取り上げられてい



石田聖子

ましたよね。

石田 そうですね。でも最近だとやっぱり日本でも人気の高い『ニュー・シネマ・パラダイス』の人气が圧倒的でしょうか。毎年、バルentinの時期になると、イタリアでは『ニュー・シネマ・パラダイス』の、キ

スシーンの場面と音楽がテレビで繰り返し流されます。

——それは日本ではない光景ですね。いま話を聞いていて思ったのは、映画音楽の難しさって、どうしても映画そのものの評価と結びつく部分があって、曲がどれだけ素晴らしくても、映画がたいしたことないと、やっぱりそんなに聴かれる機会がない気がします。でも、モリコーネの場合は、映画も素晴らしくて、音楽も素晴らしくいう、僕にとっては、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』がまさにそれにあたるわけなんです、そういうケースが多い気がします。

石田 先生のモリコーネとの出会い、最初にこの曲はモリコーネなんだって印象に残っている曲とか、あるいは個人的に好きな作品があったら教えてもらえますか。

石田 最初の出会いははつきり覚えていません。後から気づいて調べたらあれもこれも全部モリコーネだったという感じですね。一番好きなモリコーネ作品は、『1900年』（ベルナルド・ベルトルッチ監督、一九七六年）のテーマ曲（ロマンツォ）です。初めて聴いた時から心を奪われてしまいました。本のなかでこの曲のエピソードが語られていたのが、映画を試写した時、試写室の暗闇の中で一気に降りてきてきた曲だったそうです。私としては神がかった感じがしていたので、そのエピソードを聞いてなるほどと、腑に落ちました。映画の内容とも関係するんですが、人間の営みひとつひとつに対する愛とか、慈愛を強く感じる曲です。個人的には実験的な曲より、こういう慈愛に満ちた感じの曲が好きですね。

——僕もこのインタビューを読んでいて、これもモリコーネの曲だったのかと思ったのがあって、同じくベルトルッチの『革命前夜』です。モリコーネの作品の中では比較的マイナーだとは思いますが、個人的には映画そのものと合わせて愛着のある曲です。

イタリアの映画音楽家たち

——モリコーネから少し離れて、映画音楽全般について改めて聞いてみたいんですが、モリコーネ以外で好きな映画音楽はありますか？

石田 ニーノ・ロータですね。映画を観るときに音楽にほとんど注意を払わないといったんですが、フェリーニ監督作品でニーノ・ロータの音楽を聞いたとき、この音楽は誰が作ったんだろうと気になって調べてCDを買いました。フェリーニの強烈な映像に負けない、強い個性を感じる音楽だと思いました。

—— イタリアの映画音楽家ということ、やっぱりニーノ・ロータとモリコーネの二人ですか。

石田 いや、他にも結構います。ルイス・バカロフとか、アルマンド・トロヴァヨリー、カルロ・ルステイケツリとか……

### インタビュ翻訳における工夫

—— この本は、最初にも言ったように非常に読みやすい訳に仕上がっているわけですが、インタビュの翻訳というのは、小説や学術論文の翻訳とは違う工夫が求められるのではないかと想像します。インタビュの文章を訳していて、何か楽しさ、あるいは難しさってありましたか。

石田 インタビュの翻訳では、話者の息遣いをいかに再現するかという点が、難しさであり楽しさであると思います。今回の翻訳では、イタリア語の原文を声に出して読んで、言葉のリズムを確認したり、どういう気持ちで発言したんだろうと想像したり、自分自身で息遣いを体験してから日本語にすることを結構やりました。

—— この本を読んでいて、肉声というか、本当に声が聞こえてくるという印象を持って、それが読みやすさにつながっていると感じました。あと、固有名詞が多いですよ。

石田 固有名詞の多さには苦労しました。

—— 映画のタイトルも人名もすごい数ですよ。

石田 インターネットには助けられましたね。あと、日本では「モリコーネ事典」(エンニオ・モリコーネ映画大全 東京エンニオ・モリコーネ研究所編著、二〇一六年)が出ています。これはすごいことで、モリコーネの仕事が網羅されています。この本にも随分お世話になりました……

—— 共訳とはいえ、分量もけっこうありますよね。

石田 そうですね。でも、リズムに乗ったら割と訳しやすいものではあったので、さほど時間はかからなかったです。あと、ずっとモリコーネの音楽を聴きながらの作業だったので、楽しく仕事ができました。

—— 非常に充実した本だなと思ったのが、モリコーネのインタビュだけではなく、「証言」のパートがあつて、たとえばベルトルッチのインタビュも入っているわけですが、それも面白かったです。特にこの人の証言を読んでほしいというのがありますか。

石田 ジュリアーノ・モンタルドの証言が個人的には印象に残りました。さつきも言った通り、モリコーネはなかなか他人に心を開かない人物だったんですが、モンタルドとはかなり打ち解けた、親密な付き合いをしていたようです。気が合ったんだと思います。モンタルドの言葉の端々に深い友情を感じました。

—— ドキュメンタリー映画のほうの監督であるトルナトーレのインタビュも載っていて、ドキュメンタリー映画のほうではアレックスサンドロさんがインタビュされていて、これは何と言うか合わせ鏡のような構成になっていて、面白いですよ。

石田 仲良しみたいです。

—— 「証言」に参加しているのは、全員イタリア人ですか。

石田 全員イタリア人です。

—— 映画のほうだと、ハンス・ジマーとかジョン・ウィリアムスとか、ハリウッドの映画音楽家のインタビュもあつて、そこも面白かったです。こちらではあえてイタリア人に限定しているんでしょうか。

石田 そうですね。これは全てアレックスサンドロがとってきたインタビュですが、この本の執筆当時、おそらくアレックスサンドロにはそこの人脈はなかったということもあると思います。

—— なるほど。もう一つ、翻訳についてお伺いしたいんですが、大学の授業や校務と、翻訳の仕事を両立させるのは、なかなか楽ではないと個人的には思うんですが、もしかしたら石田先生にとっては楽なことかもしれないんですけど、石田先生は翻訳の仕事をするときは、授業期間

も含めて毎日コツコツされているのか、それとも夏休みとか、あるいは春休みなど、まとまった時間をとれるときにバーツとやってしまうのか、どちらのタイプでしょうか。

石田 長期休暇中にやります。学術論文の翻訳であれば授業期間中にもできるんですが、例えば小説であったり、今回のインタビューのような、なんというか世界を再構築するようなタイプのものを訳すときは、完全にそれに集中しないとできないんですね。もちろん締め切りが許せば、ですが。実際モリコーネの場合は許したので、休暇中に集中して取り組みました。

——なるほど。日本での刊行は、映画の公開に合わせたわけではなかったんですね。

石田 これは本当に偶然なんです。この本は、本当は、一年前に刊行される予定でしたし。でも、遅れてよかったなと思っています。あと、もう一冊トルナトーレによるモリコーネのインタビュー本の翻訳が出たんですよ（『エンニオ・モリコーネ映画音楽術』のこと）。この本の一ヶ月後に。示し合わせていたわけではなかったのに。

——翻訳作業中は知らなかった情報だったんですか。

石田 知らなかったです。本当に驚きました。

——モリコーネは二〇二〇年に亡くなったわけですけど、再評価の波とか、総括の波が来ているっていう感じなんですか。

石田 そういう時期なんだと思います。しかもこの本が出て二ヶ月後にコンサートまであったんです。モリコーネの息子さん（アンドレア・モリコーネ）が指揮するワールドツアーの日本公演です。

——やはり何かがあるとき、タイミング的に来ていたんでしょね。今日は興味深い話をいっぱい聞かせていただき、ありがとうございます。そして、非常に面白い充実した訳書を読ませていただいて、改めてどうもありがとうございました。

聞き手プロフィール

木内 堯 名古屋外国語大学 外国語学部 フランス語学科 准教授



専門はフランス文学。共著書に『フローベール 文学と〈現代性〉の行方』（永声社、二〇二二年）、共訳書に『作家たちの手紙』（マール社、二〇二二年）、ミシエル・ウエルベック『滅ぼす』（河出書房新社、二〇二三年）。

インタビューを終えて

今回のインタビューでは、エンニオ・モリコーネについて話ができるのが嬉しくて、つい出しゃばって話しすぎてしまったが、私の話はさておき、石田先生から訳書について詳しい話を聞くことができて、この本をまだ読んでいない人にとっても、すでに読んで人にとっても、読み応えのあるインタビューになったと思う。未読の人にはぜひこの機会に本書に手に取ってもらいたい。

個人的には、今回のインタビューは、映画音楽について考える機会にもなった。映画音楽のよいところは、映画を観終わった後も、その音楽を聴くことで、映画の余韻に浸れるところである。音楽を聴きながら、映像も一緒に思い出す。そして、いつの間にかその音楽は、私たちの人生のサウンドトラックにもなる。いままでもそんな風にして映画音楽を聴いてきたし、これからも人生の伴奏をしてくれるような音楽にたくさん出会えたらと思う。